

地 理 歴 史

世界史A、世界史B

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

世 界 史 A

1 前 文

平成21年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）における「世界史A」の受験者は2,187名であり、地理歴史科6科目の中で、受験者数が最も少ない科目（科目選択率0.6%）である。今年度の平均点は44.18点であり、地理歴史科6科目の中で最も低かった。平成20年度に比べて5.10点低下しており、過去5年間の中でも最も低かった。また、「世界史B」との平均点の差は18.52点であった。平成20年度に比べて8.82点拡大しており、「日本史A」と「日本史B」、「地理A」と「地理B」の差よりも大きくなっている。これらの点については、近年配慮がなされ改善の方向にあるという評価がなされてきたが、平成18年度までの傾向に戻った感は否めない。この結果を踏まえ、その原因の分析と考察を通して、今後とも「世界史A」の出題の視点、出題内容及び難易度等について、更なる検討をお願いしたい。

以下、問題についての細部にわたる検討は、今年度も従来と同様、次の観点をもとに実施した。

- (1) 高等学校学習指導要領に準拠し、「世界史A」の目標を反映した問題であるか。
- (2) 「世界史A」の教科書内容に即した問題であるか。
- (3) 「世界史A」における基本的事項の理解と歴史的思考力を評価する適切な問題であるか。
- (4) 地域・分野・時代のバランス及び難易度・形式・表現などが適切であるか。

2 内 容・範 囲

(1) 試験問題の構成・内容

大 問	設問数	配 点	内 容
第1問 モニュメントや歴史的建造物（33点）			
A	4問	12点	パルテノン神殿の歴史
B	4問	12点	ドイツの国会議事堂の歴史
C	3問	9点	タイのモニュメントの歴史的背景
第2問 歴史における人々の移動や離散（34点）			
A	4問	12点	アフリカ系黒人奴隷の歴史
B	4問	12点	華僑の歴史
C	3問	10点	ロシア・ソ連の民族問題
第3問 世界史における伝統と変革（33点）			
A	4問	12点	イスラーム世界の発展と変革
B	4問	12点	インド世界の民族的伝統
C	3問	9点	ヨーロッパ統合の構想

第1問は、「モニュメントや歴史的建造物」という視覚的対象を題材に、生徒の「興味・関心」を「歴史的考察力」に発展させることを意図したテーマ設定であった。特にA、Bではその出題の観点が明確であり、「世界史A」問題としてふさわしいものであった。第2問は、「歴史における人々の移動や離散」というテーマ設定で、現代世界の前提である諸地域の相互関連や変動を人間の移動を通して考察させる「世界史A」にふさわしい設定であった。特にAは前近代から現代までの黒人の歴史の基本事項が出題されておりまとまりを感じた。第3問は、文化の重要な構成要素である「宗教・思想・伝統」が歴史を動かす原動力の一つとなってきたという視点に立って、世界史を動的に考えるヒントとなる優れたテーマ設定であった。特にCでは主権国家体制成立からこれを超越する枠組みを提示することで「国民国家の課題」を考えさせるという意欲的出題であった。

(2) 地域別の出題数・出題率

地 域	平成 21 年度 出題数（出題率）	平成 20 年度 出題数（出題率）	平成 19 年度 出題数（出題率）
ヨーロッパ・北アメリカ	18 (54.5%)	18 (54.5%)	2 (6.4%)
東 ア ジ ア	3 (9.1%)	6 (8.2%)	8 (4.2%)
南アジア・東南アジア	3 (9.1%)	1 (3.0%)	5 (5.2%)
西アジア・北アフリカ	6 (18.2%)	4 (2.1%)	4 (2.1%)
アフリカ・オセアニア・ラテンアメリカ	0 (0.0%)	2 (6.1%)	3 (9.1%)
複 数 地 域 混 在	3 (9.1%)	2 (6.1%)	1 (3.0%)
合 計	33 (100.0%)	33 (100.0%)	33 (100.0%)

地域別の出題数は、2年連続でヨーロッパ・北アメリカからの出題が半数以上を占めた。また、東アジアと南アジア・東南アジアからの出題が複数地域混在を含めても8題と少ないのも昨年同様である。一方で西アジアからの出題が6題と大きな比重を占めている。地域間バランスという観点からは、選択肢にはあるが、解答に要求されていない地域もあり、配慮をお願いしたい。

【複数地域混在の問題】（地域別の分類は上の表に準ずる。）

- 13 ヨーロッパとアフリカ 19 東アジアと東南アジア
28 東アジアと東南アジアと南アジア

(3) 分野別の出題数・出題率

分 野	平成 21 年度 出題数（出題率）	平成 20 年度 出題数（出題率）	平成 19 年度 出題数（出題率）
政 治 史	25 (75.8%)	26 (78.8%)	24 (72.7%)
社 会 経 済 史	1 (3.0%)	5 (15.1%)	6 (18.2%)
文 化 史	5 (15.1%)	2 (6.1%)	3 (9.1%)
複 数 分 野 混 在	2 (9.1%) ^{※注}		
合 計	33 (100.0%)	33 (100.0%)	33 (100.0%)

※注 従来は「政治史」・「社会経済史」・「文化史」の3分野で出題数を分析していたが、今年度は明らかに「複数分野混在」に該当する問題が出題されたので、これを3分野に加えた。

政治史重視の傾向は変わらず大半を占めている。社会経済史が分野混在を含め2題と従来に比べ激減する一方、文化史の出題が分野混在を含め6題と増加している。文化史関連の多くは前近代の諸文明の基本的特徴を問うものであり、「世界史A」の性格を的確に反映した出題であった。

【複数分野混在】（分野別の分類は上の表に準ずる。）

- 14 政治史と社会経済史 28 政治史と文化史

(4) 時代別の出題数・出題率

時 代	平成 21 年度 出題数（出題率）	平成 20 年度 出題数（出題率）	平成 19 年度 出題数（出題率）
古 代	4 (12.1%)	2 (6.1%)	1 (3.0%)
中 世	2 (6.1%)	4 (12.1%)	1 (3.0%)
近 世	3 (9.1%)	1 (3.0%)	3 (9.1%)
近 代	7 (21.2%)	4 (12.1%)	15 (45.5%)
現 代	13 (39.4%)	19 (57.6%)	10 (30.3%)
複 数 時 代 混 在	4 (12.1%)	3 (9.1%)	3 (9.1%)
合 計	33 (100.0%)	33 (100.0%)	33 (100.0%)

前近代の出題が増加した。特に古代史からの出題が複数時代混在を含めると5題となり、近年で最も多く出題された。そのうち「諸地域世界の文明の特質」に関するものが4題であり、「世界史A」の性格に合致している。昨年増加した「現代史」は減少した。また「近代史」も昨年来

数が抑えられており「近現代史を中心とする世界の歴史を理解させる」という「世界史A」の趣旨が若干後退しているように思える一方で、冷戦後の現代史が2題出題されており、受験者にとっては「学習範囲の増加」と感じるのではないか。

【複数時代混在の問題】（時代の分類は上の表に準ずる。）

5	近代史と現代史	13	中世史と近世史と近代史
27	古代史と中世史	28	近世史と近代史

3 分量・程度

出題数に関しては、ここ数年、大問が3問、全出題数は33問という状況が続いている。この点に関しては以前から少ないのではという指摘があったが、今年度は複数事項の組合せによる出題がかなり増加しており、また6択問題が2問出題されるなど、出題方法の工夫により一定の改善がなされたように思われる。一方で、ここ数年、写真・グラフや統計資料を用いて考察させる出題が減少を続けていたが、昨年と同様に、今年度も1問だけの出題であった。やはり、正答を導く上で、様々な角度からの考察を必要とする設問が少ないように感じられ、また、広く様々な時代・地域を取り扱う「世界史A」という科目の特性からも考えると、やはり出題数はもう少し増加されることが望まれる。

難易度に関しては若干上がったように思われるが、出題内容はおおむね教科書の内容にそったものであった。以下、高等学校学習指導要領・教科書・学習内容の観点から良問・難問に分類し検討を行う。

【良問】

第1問 「モニュメントや歴史的建造物」に関する出題であった。問2は、パルテノン神殿について、その機能と文化的背景に関する二つの文章の正誤判断が出題されたが、基本的事項を取り扱うとともに、「ギリシア・ローマ文明の伝統」という観点を含む良問であった。問6は、戦間期におけるドイツの状況が出題されたが、基本的事項を取り扱うとともに、近現代史を重視するという「世界史A」の趣旨にそう良問であった。問9は、第一次世界大戦における秘密外交に関し、二つの文章による正誤判断が出題されたが、現代の中東情勢ともかかわりを持つヨーロッパ諸国の動向を結び付けた出題であり、「アジア・アフリカ諸国が抱える問題などについて考察させる」という「世界史A」の趣旨にそった良問であった。

第2問 「歴史における人々の移動や離散」に関する出題であった。問2は、アフリカにかかわる三つの出来事の年代判断が6択により出題されたが、中世から近代までの広い時代を含む設問であるとともに、アフリカ内陸部での「イスラームの成立と拡大」という観点や、ヨーロッパ諸国のアフリカやアジアへの進出にかかわる「16世紀の世界の一体化」といった観点を含んでおり、よく考えられた設問と言える。問3は、アメリカ合衆国における黒人奴隷制度をめぐる状況に関し二つの文章による正誤判断が出題されたが、「大西洋貿易の展開」・「拡大する貿易活動」という観点を含み、また「人類の課題について考察させる」という「世界史A」の目標にもかかわる良問であった。問5は、近代における中国の状況が出題されたが、日本の動向との関連からの出題であり、「我が国の歴史と関連付けながら理解させ」という「世界史A」の目標にそう良問であった。

第3問 「世界史における伝統と変革」に関する出題であった。問3は、近世以後のイスラーム世界と西欧諸国とのかかわりが出題されたが、「ヨーロッパの進出期におけるアジア諸国の動向」という観点を含み、「世界史A」の趣旨にそった良問であった。問5は、インドにおける伝統的な宗教とその後のイスラーム教の拡大に関する出題であったが、「南アジア世界の特質」・「ユーラシア規模の交流圏の成立」という観点を含むとともに、現在のインド・パキスタンの対立という状況にも関連し、「アジア・アフリカ諸国が抱える問題などについて考察させる」という「世界史A」の趣旨にそった良問であった。問10は、ヨーロッパ共同体（EC）の設立年代が出題されたが、最も先進的な地域統合にかかわる出題であり、「国際社会の変化や国民国家の課題」といった要素を含む「世界史A」の趣旨にそった良問であった。

【難問】

第1問 問5は、ドイツ帝国の政治に関し二つの文章による正誤判断が出題されたが、特に「第一次世界大戦前に、スパルタクス団が結成された。」という文章が誤りであると判断することは、その結成年代に非常に細かな知識を要求されるものであり、近現代史を重視する「世界史A」といえども、厳しい設問と考えられる。問8は、ベルリンの壁の建設から崩壊までの時代の出来事が出題されたが、ベルリンの壁の建設時期を正確に判断することが要求され、問5と同様に「世界史A」の内容としては厳しいと考えられる。問10は、1930年代の出来事が出題されたが、オタワ（イギリス連邦経済）会議の開催の年代を正確に判断することは詳細な知識を要求され、「ブロック経済が形成された。」といった表現があれば、判断しやすかったように思われた。

第2問 問8は、シンガポールに関係する二つの国名の組合せが出題されたが、特に、1965年にシンガポールがマレーシアから独立したという判断は、「世界史A」の水準から考えると難問であった。むしろ、第二次世界大戦前のイギリス支配、大戦中の日本の支配といった国名を組み合わせた方がよいように思われた。問9は、19世紀後半のユダヤ人をめぐる状況に関し、二つの文章による正誤判断が出題されたが、「ユダヤ人の間にシオニズム運動が起こった。」という文章の正誤判断は、近現代史を重視するといえども、「世界史A」としては難しい内容のものである。問10は、20世紀前半のロシア・ソ連の状況が出題されたが、狭い時代からの出題に伴い、それぞれの選択肢が詳細な事実判断を必要とするものであり、厳しい設問と思われた。

第3問 問6は、三つの出来事の年代判断が6択により出題されたが、ヨーロッパとアジアの関連を問うものであり非常によい設問である。しかし、アンボイナ事件や、「イギリスがインドを直接統治下に置いた。」といった事柄の年代を正確に判断することは、「世界史B」としては良問と思われるが、「世界史A」の水準から考えるとやや厳しい設問と思われた。問9は、1923年以前の状況が出題されたが、正答となる「デパートが出現した。」という選択肢の時代判断は非常に詳細な知識を必要とし、問6と同様に、難問であると思われた。

4 表現・形式

設問形式	平成 21 年度 出題数(出題率)	平成 20 年度 出題数(出題率)	平成 19 年度 出題数(出題率)
正しい（適切な・該当する）ものを選択	28 (84.8%)	31 (93.9%)	27 (81.8%)
誤った（関係ない）ものを選択	5 (15.2%)	2 (6.1%)	6 (18.2%)
文章選択	19 (57.6%)	23 (69.7%)	23 (69.7%)
事項（語句）選択	1 (3.0%)	3 (9.1%)	2 (6.1%)
複数の事項（語句）の組合せ、並べかえの選択	12 (36.4%)	6 (18.2%)	4 (12.1%)
地図・写真・絵画・グラフなどを使用した設問	1 (3.0%)	1 (3.0%)	4 (12.1%)
合 計	33 (100.0%)	33 (100.0%)	33 (100.0%)

- ① 昨年度と同様に「世界史A」・「世界史B」の共通問題は設定されなかった。
- ② 誤答選択形式が、昨年度の2問から5問に増加した。出題形式が単純にならないようにするためには、望ましい傾向と思われる。
- ③ 事項（語句）を選択する問題が1問に減少した。②と同様の理由から望ましい傾向と思われる。一方で、写真を用いた出題が1問だけであり、地図やグラフ・統計資料を使った問題が出題されなかった。ここ数年減少傾向にあるが、様々な角度からの歴史的思考を問うためには、今後はこのような出題が増加することを望む。
- ④ 複数事項（語句）の組合せや並べかえによる出題は大きく増加した。また減少傾向にあり、昨年は全く出題されなかった6択問題は、今年度は2問出題された。幅広く、多くの知識を関連付けて問うためには、このような出題形式が維持されることを望む。
- ⑤ 昨年指摘されていた、文章選択形式の出題における、各選択肢の文章の長さのばらつきについては一定の改善が見られた。

次に、問題作成上、配慮が必要と考えられる出題をあげる。第1問の問1は、写真を用いての出題であったが、問題文に「古代ローマを代表する建造物」とあり、写真と関係なく正答を選べる設問であり、出題方法に疑問が残った。また、第1問の問9以下においては、バンコクのモニュメントの写真が使用されていたが、実際には設問と直接かかわらなかった。写真を用いての出題は難しい側面があると思うが、写真をもとに正答を導くような出題を今後はお願いしたい。問11は、文章中の波線部の正誤を判断する設問であったが、昨年の指摘と同様に、波線部がなくても設問として成立しているものであり、波線部をあえて付ける必要性が感じられなかった。第2問の問6では、正答が二つあるのではないかという指摘がなされた。しかし、明確に事実と反するという判断が可能であり、受験者にとって正答を考える上で大きな影響はなかったと思われる。ただ、「清朝と交渉し」という部分がなければ全く問題はなかったので、今後は更なる慎重な問題作成をお願いしたい。問11では、ソ連崩壊後の出来事が出題され、「プーチンが、ロシアの大統領となった。」が正答となったが、このようなごく最近の出来事まで出題されるようになると、受験者にとって、戦後史の学習範囲が非常に広くなり、かなり負担となるように思われる。

また、同時代の出来事を選ぶような出題において正しい文章が一つと誤りの文章が二つ、若しくは三つという設問がいくつか見られた。このような場合であると、時代の判断以前に、文章の正誤判断で正答が選べることになり、設問形式としては不適切と思われるので、今後の改善をお願いしたい。

5 要 約

以上、各設問を個々に検討してきた。今年度も、おおむね高等学校学習指導要領の目標にそい、教科書の内容をよく踏まえた出題であった。

大問には、「モニュメントや歴史的建造物」や「歴史における人々の移動や離散」、「世界史における伝統と変革」といった興味深いテーマが設定されていた。「世界史A」にふさわしい今日的な問題や興味深いテーマを取り上げた意欲的な出題と評価したい。

難易度は近年の出題に比べてやや高いものとなっている。2語又は2文の正誤を判定させる設問や年代整序の設問が多くなり、また「世界史A」の内容としてはやや細かい知識を問う設問が見られたことがその要因と思われるが、おおむね高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえた適切な出題であった。

地域別の出題では、複数地域混在の設問が3問出題された。第2問の間8は東南アジアの植民地化に関する出題であったが、「近現代の世界の形成過程を我が国の歴史と関連付けながら学ぶ」（『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』）とする「世界史A」の基本的性格から考えても、その趣旨にそった出題であると言える。

分野別の出題に関しては、社会経済史が昨年の5問（15.2%）から1問（3.0%）に減少した反面、文化史が2問（6.1%）から5問（15.2%）に増加した。第1問及び第2問の文化史については、いずれも大問やリード文との関連性が高い出題であった。

時代別の出題では、近代史と現代史が合わせて20問（60.6%）となっており、近年減少の傾向にあるが、「世界の歴史の大きな流れと特質を近現代史を中心に理解させる」（『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』）という科目の基本的性格におおむねそった出題であった。また、近代史と現代史のバランスについても改善されており、昨年度の指摘が活かされたものとして評価したい。

出題形式については、昨年度増加した複数の歴史的事項の組合せから選択させる出題が、今年度さらに倍増し12問（36.4%）となった。特に昨年度見られなかった6択問題が2問出題された。いずれも複数の地域、時代にまたがった年代整序の設問となっているためやや難問となっていたが、諸地域世界の接触・交流にも関連した出題となっており、十分に工夫された意欲的な良問であった。第3問の間10は、年表形式で歴史事項の時期を問う出題であった。第二次世界大戦後を中心にヨーロッパ統合の過程が時系列にそってまとめられ、リード文とも関連させた良問であると評価したい。

今年度は全般的にリード文と設問の関連性が高く、よく配慮されていると言える。特に第2問の間3・間4は、奴隷制度や近現代史における差別と人権の歴史をリード文と密接に関連させた設問であり、現代史において「人類の当面する課題を多角的に考察させる」（『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』）とする科目の目標にもそった出題として評価したい。

3年目となった大問3問・出題数33問は定着した感がある。出題数がやや少ないとの指摘が行

われてきたが、複数の歴史事項の組合せから選択させる出題形式が増加していることは、改善を模索する試みとして評価したい。今後は、地図・写真・図表・グラフなどの多様な資料との組合せから歴史事項を思考・判断させる出題方法にも取り組んでいただきたい。

しかし、その一方で次のような課題も見られた。

地域別の出題では、平成 20 年度と同様に欧米史の割合が 18 問（54.5%）と高く、特に東アジアに関する設問が半減し、オセアニアやラテンアメリカに関する出題がなかったことは、今後検討をお願いしたい。

分野別の出題では、社会経済史が昨年度の 5 問から 1 問に減少した。今年度増加した複数組合せの設問において地図やグラフと組み合わせて出題することも可能であると思われる。今後の工夫に期待したい。

出題形式においては、資料を活用した出題が写真問題 1 問にとどまっており、地図・図表・グラフなどを利用した設問がなかった。第 1 問では、リード文のテーマと関連させて写真が 3 点取り扱われているが、写真資料からの判断が必要なかったり、設問に直接関係していないなど、その利用の仕方に疑問が残った。資料と個々の設問の関連にも配慮した工夫改善をお願いしたい。

選択肢の文章の長さ（分量）にばらつきが見られることに関しては、徐々に改善されていると言えるが、その表現に疑問の残る設問が見られた。第 1 問の問 4 は地理的な知識から選択肢の正誤を判断する設問であったが、四つの選択肢すべての冒頭に「〇〇世紀に」という時代を意識させる表現が用いられており、受験者の中には戸惑ったものもいたと思われる。今後も、受験者の学力をより適正に評価するため、各選択肢の文章の長さ・表現に配慮をお願いしたい。

最後に、高等学校段階での学習の達成の程度を判定するというセンター試験の目的に照らして、「世界史 A」は、高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、よく工夫された出題がなされており、おおむね適切であると言えよう。ただし、上述したような個別の課題も見られる。これまで述べてきた総括的な評価を、今後の問題作成・検討に活かしていただき、次年度以降もより一層「世界史 A」にふさわしい問題作成がなされるようお願いしてまとめとしたい。

世界史 B

1 前 文

本年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の「世界史B」の受験者は94,106人と昨年より178人の微増であるが、ここ3年間では常に増加の傾向が続いている。昨年に比べ「日本史B」は651人、「地理B」は2,097人の増加であり、単年度の増加で言えば「世界史B」の増加は鈍化している。この原因は昨年度の「世界史B」が難しかったことが要因と考えられる。ただし平成18年度との比較では「世界史B」が3,897人の増加に対し「日本史B」は632人、「地理B」は1,332人の減少であるため「世界史B」の難化が継続しなければ「世界史B」の受験者減少には歯止めが掛かる期待ができるのではないかと思われる。

本年度の「世界史B」の平均点は62.70点と昨年に比べ3.72点の上昇が見られた。一昨年の67.75点、その前年の66.25点に比べると低く感じられるが60～65点の間に平均点があることから問題のレベルがほぼ妥当なものであったと考えられる。国際化への対応が一層進む中で世界史の必修は継続されるが、高校生の世界史学習のモチベーションは決して高くない。センター試験を通じて世界史学習の意欲や興味を喚起する働きかけが必要なのではないだろうか。その意味で従前より「世界史B」は標準偏差の大きい科目であり、受験者の学力差も顕著に表れるため、この点に対する継続的な配慮を期待したい。

本年度も昨年度に引き続いて「世界史A」との共通問題は見られなかった。また従来から行われている現行の高等学校学習指導要領で重視されている「接触・交流」や「文化の多様性」などに配慮されたリード文を題材にして設問展開を行う形式は前年度を踏襲している。昨年度と異なる点では、a、bの二つの文の正誤を問う形式が増加し、従前に比べ受験者に対して、より正確な知識を要求する形式となった。また政治史に対し文化史や社会経済史の分量が増し、前述の「文化の多様性」にかかわる出題が意識されたことも感じられた。

以下、問題についての細部にわたる検討は、本年度も従来と同様、次の観点で行った。

- (1) 高等学校学習指導要領に準拠し、「世界史B」の学習目標に適合しているか。
- (2) 教科書の内容に即し、それを逸脱しない出題であるか。
- (3) 世界史の基本事項の理解と歴史的思考能力を評価する適切な問題であるか。
- (4) 問題数・配点や出題の地域別・時代別のバランスが適切であるか。
- (5) 問題の難易度・形式・表現などが適切であるか。

2 試験問題の内容・範囲等（分析については、正解となっている選択肢を対象とした。）

(1) 試験問題の構成・内容

大 問	設問数	配 点	内 容
第1問 生業と労働の歴史（25点）			
	A 3問	8点	中国・唐代以降の文化・社会
	B 3問	9点	アルプス以北のヨーロッパの15世紀以降の傭兵
	C 3問	8点	「鉄鋼王」アンドルー＝カーネルギーとその時代
第2問 学校・教育の歴史（25点）			
	A 3問	9点	ヨーロッパの学校教育とイスラーム世界からの影響
	B 3問	8点	中国の学校・学問と西洋との関係
	C 3問	8点	歴史教科書・歴史教育をめぐる多国間の対話
第3問 信仰や宗教の歴史（25点）			
	A 3問	9点	東北アジア地域における太陽信仰
	B 3問	8点	東南アジアの信仰の重層性
	C 3問	8点	中世ヨーロッパの ^{しよくさい} 贖罪と祈り
第4問 人々の移動・移住の歴史（25点）			
	A 3問	8点	ラテンアメリカへの民族の移住
	B 3問	8点	インドにおける人の移動
	C 3問	9点	中央ユーラシアの人の移住と、宗教・言語の変容

(2) 地域別の出題数・出題率

年度・出題数 地 域	平成21年度	平成20年度	平成19年度
	出題数（出題率）	出題数（出題率）	出題数（出題率）
西 欧 ・ 北 米	10 (27.8%)	8 (22.2%)	14 (38.9%)
東 欧 ・ ロ シ ア	1 (2.8%)	2 (5.6%)	2 (5.6%)
東 ・ 内 陸 ア ジ ア	10 (27.8%)	11 (30.6%)	10 (27.8%)
南 ・ 東 南 ア ジ ア	2 (5.6%)	4 (11.1%)	4 (11.1%)
西アジア・アフリカ	8 (22.2%)	6 (16.7%)	3 (8.3%)
中南米・オセアニア	2 (5.6%)	3 (8.3%)	1 (2.8%)
複 数 地 域 混 合	3 (8.3%)	2 (5.6%)	2 (5.6%)
合 計	36 (100.0%)	36 (100.0%)	36 (100.0%)

昨年に引き続き、西アジア・アフリカからの出題が増加している。複数地域混合問題の出題が定着した。

(3) 分野別の出題数・出題率

年度・出題数 分 野	平成 21 年度	平成 20 年度	平成 19 年度
	出題数 (出題率)	出題数 (出題率)	出題数 (出題率)
政 治 史	17 (47.2%)	28 (77.8%)	22 (61.1%)
社 会 経 済 史	7 (19.4%)	5 (13.9%)	6 (16.7%)
文 化 史	9 (25.0%)	3 (8.3%)	8 (22.2%)
複 数 分 野 混 合	3 (8.3%)		
合 計	36 (100.0%)	36 (100.0%)	36 (100.0%)

政治史が大幅に減った。従来も散見された複数分野混合の出題が定着したため、時代別や地域別にならない、この項目を本年度から加えた。

(4) 時代別の出題数・出題率

年度・出題数 時 代	平成 21 年度	平成 20 年度	平成 19 年度
	出題数 (出題率)	出題数 (出題率)	出題数 (出題率)
古 代 史	4 (11.1%)	4 (11.1%)	3 (8.3%)
中 世 史	12 (33.3%)	10 (27.8%)	8 (22.2%)
近 世 史	8 (22.2%)	5 (13.9%)	11 (30.6%)
近 代 史	4 (11.1%)	8 (22.2%)	8 (22.2%)
現 代 史	4 (11.1%)	7 (19.4%)	4 (11.1%)
[うち戦後史]	3 (8.3%)	3 (8.3%)	1 (2.8%)
複 数 時 代 混 合	4 (11.1%)	2 (5.6%)	2 (5.6%)
合 計	36 (100.0%)	36 (100.0%)	36 (100.0%)

時代区分については、おおよその目安として、古代（～4世紀）・中世（5～14世紀）・近世（15～17世紀）・近代（18～19世紀）・現代（20世紀～）とした。

近代史・現代史が減少して中世史が増加するとともに複数時代混合問題も増加した。

(5) 設問形式別の出題数・出題率

設問形式	年度・出題数	平成 21 年度	平成 20 年度	平成 19 年度
		出題数(出題率)	出題数(出題率)	出題数(出題率)
正しい(適切な・該当する)ものを選択		31 (86.1%)	35 (97.2%)	32 (88.9%)
誤った(関係ない)ものを選択		5 (13.9%)	1 (2.8%)	4 (11.1%)
文章選択		25 (69.4%)	24 (66.7%)	23 (63.9%)
事項(語句)選択		1 (2.8%)	2 (5.6%)	7 (19.4%)
複数の事項(語句)の組合せから選択		6 (16.7%)	6 (16.7%)	5 (13.9%)
地図・写真・絵画・グラフ・年表などを使用		4 (11.1%)	4 (11.1%)	1 (2.8%)
合計設問数		36 (100.0%)	36 (100.0%)	36 (100.0%)

- ① 主題を設定した大問数が4問という形式に変化はなく、問題数の36問は今年度も踏襲された。
- ② 昨年度に続き「世界史A」との共通問題はなかった。
- ③ 誤ったものを選択する形式が、昨年度の1問から5問に増加した。
- ④ 事項(語句)選択形式の出題数が、1問となり減少した。
- ⑤ 地図・写真・絵画・グラフ・年表等を使用した形式が、昨年度と同じく4問出題された。
- ⑥ 6択問題が昨年度と同じく1問出題された。

3 試験問題の分量・程度

本年度の試験問題では、地域別で西アジア・アフリカが増加したがおおむね例年と同様であり、また社会経済史や文化史からの出題が多く政治史が減少した。更に地図や写真を利用した出題も多くなされたが全般に基本的な事項を内容とする出題が多く、問題としては標準的であり、昨年度に比べ、出題の難易度はやや易化した。試験時間と分量(設問数36問)、試験時間と問題の難易度については適切であった、と考えられる。

以下、試験問題の分量・程度について「世界史B」の教科書・学習内容などの視点を含めながら大問ごとの検討を行った。

第1問 生業と労働の歴史

経済、社会、政治の変化と、それに伴う生業と労働の変容について問うリード文である。Aでは、中国の文筆家や芸術家と、科挙合格者及び商工業の発展との関連について、Bでは、アルプス以北のヨーロッパでの下層民と傭兵との関係について、Cではアメリカの「鉄鋼王」アンドルー＝カーネギーを取り巻く社会状況の変化について述べている。全体的な難易度は標準的である。

問1 唐代から宋代にかけての、科挙合格者である文化人・政治家と、その業績についての出題。人物とその時代について問う問題である。正文が明解なため、やや易しい。

問2 明代の、社会・経済、文化、政治のそれぞれについて問う問題。標準的な出題である。

問3 明代の社会・経済を問っている。湖広は教科書出現頻度はあまり高くないが、選択であるため答えやすいかと思われる。標準的な出題である。

- 問4 中世から近世にかけての西欧の農村や都市の状況に関する問題であり、言葉の意味や時代背景をしっかりととらえている必要がある。標準的。
- 問5 15世紀後半から16世紀後半に起こった出来事を、中国やインドのことも絡めて選ぶ問題である。正解は、西欧史の流れから推測できるかもしれないが、マラータ同盟の結成時期を問うのは難しい。やや難問である。
- 問6 各地の兵制や兵士について、その特徴や背景まで含めて問うた問題。リード文の地域や時代に関係ない出題となっており、正確な知識が必要とされる。誤文が重要事項を踏まえていて判断しやすく良問である。
- 問7 19世紀イギリスの商業・製造業にかかわる出来事の正誤を問う問題。それぞれの出来事の内容や背景を正確に知る必要があり因果関係の理解を要求する良問である。
- 問8 アメリカ合衆国の19世紀以降の産業・経済について問う問題。標準的だが、①③の文がともにエディソンに関係するため、もう少し工夫が欲しい。
- 問9 労働問題に関して、仏・米・英・国際連盟が行った政策について問う問題。ILOやワグナー法の中身、労働組合法の成立時期などを知る必要がある。難問である。

第2問 学校・教育の歴史

世界史における学校・教育について、時代・地域による特徴を見る問題。Aでは、古代ギリシアのアカデメイアの流れと、イスラーム世界からの影響を受けた中世ヨーロッパの大学を、Bでは10世紀以降の中国の学校・教育を、西洋の影響という視点からとらえ、Cでは、歴史教科書、歴史教育について、各国間の話し合いの中で作り上げていった例をあげている。リード文と出題内容の関連性も強く、出題の意図が明確に感じられた。全体の難易度としては標準的であった。

- 問1 ユスティニアヌス帝が在位した国名と、イスラーム世界での法学を中心とする学校の一般名称を組み合わせて答える問題。単発的知識を問い、内容も基礎的事項で、受験者には答えやすかったと思われる。易しい問題である。
- 問2 ユスティニアヌス帝の業績を問うている。帝の治世、一時的に領土が拡大したが、その版図をだいたい理解していれば判断できよう。標準的な問題である。
- 問3 下線部は「12世紀ルネサンス」だが、12世紀に起こった事柄を問う問題。下線部と選択肢の関連性が希薄で、なおかつ正解は鎌倉幕府成立だから、中学校時代の知識がしっかりあれば解答できるため、強い違和感を感じる。
- 問4 中国と朝鮮（高麗）における官吏登用制度に関する問題。郷挙里選、九品中正、殿試がいつから始まったかが分かれば、消去法でも答えを導ける。標準的な問題である。
- 問5 中国におけるキリスト教布教やイエズス会宣教師に関する問題。イエズス会師個々人の業績や時代、さらに典礼問題の背景と、キリスト教布教の自由を認めた条約まで幅広く問うている。標準的な問題で良問である。
- 問6 周恩来の肩書きについて、a、b 2事項の正誤を問う問題。中華人民共和国での主席と首相の役割を認識しないと難しい。周恩来の肩書きよりは事績を問うこともできたのではないかとと思われる。
- 問7 イギリスの教育法制定時期とアズハル学院の設置王朝・場所を問う2文の正誤問題。と

もに、あまり容易ではない項目であり、受験者にとってはやや難しく感じたかもしれない。

問8 北欧の歴史については、理解しづらい受験者も多いと思われる。正文の、ルター派が広まったこととその時期は、比較的分かりやすい項目ではあるが、誤文③が難しく④も平易ではないため正答率は低くなるのでは、と考えられる。

問9 ユーゴスラヴィアについて地図上の位置と、2文のうち正しいものを選ぶ組合せ問題。2文のうち、チャウシェスクがユーゴでないことは、判断が易しいかもしれないが、戦後史で地図問題であるために正答率が下がる可能性がある。

第3問 信仰や宗教の歴史

信仰や宗教と、それが社会に与えた影響について、Aでは東アジアにおける「天」について、Bでは東南アジアにおける精霊信仰を基盤とした重層的な信仰について、Cでは中世ヨーロッパの昇天への願望について述べている。受験者にとってなじみの薄い地域が多く扱われ、また一つの設問の中で地域も時代も異なった事項を扱ったものも多かったため、全体的な難易度はやや難であった。

問1 各地の様々な宗教についての問題であるが、エジプトの太陽神ラーの信仰は比較的分かりやすいものと思われる。

問2 高句麗の対外関係を問う問題である。高句麗史としてとらえると難しいが新羅の半島統一過程を理解していれば正解の指摘は十分に可能である。

問3 a 劉邦について、b 耶律大石について、それぞれ述べた文の正誤の組合せである。内容は基本的事項と言えよう。

問4 二つの写真の説明文の正誤を問う問題である。アンコール=ワットがヒンドゥー寺院として建立されたことは知られているが、ドンソン文化はあまりなじみがない用語かもしれない。やや難である。

問5 イスラーム教の拡大についての問題である。正文がアフリカ史であることに加え、誤文①②は年代で判断を迷う可能性が高い。難問である。

問6 オセアニアについての問題である。オーストラリアの先住民アボリジニーとニュージーランドのマオリ族の区別、ハワイが王国が滅ぼされてアメリカが支配したことは押さえないがクックの探検が18世紀か否かの判断はやや難しい。

問7 「死の舞踏」が標準的と言えず、その内容まで問うことは高校生にとっては難しかり。また正文のオシリス神についても平易とは言えない。難問である。

問8 8世紀に起こった出来事の正誤を判断させる問題。正文は下線部にあまり関連のないアッバース朝の事柄であり、ハールーン=アッラシードの治世が8世紀末から始まることを判断するのはやや難しいであろう。

問9 これもa、b二つの文の正誤を問う問題。クリュニー修道院は基礎的事項だが、ヘンリ8世の改革の内容についてはやや迷うかもしれない。

第4問 人々の移動・移住の歴史

高等学校学習指導要領でも、「諸地域世界の交易や移民による結び付き」として扱われている人の移動を多方面から扱ったリード文である。Aではラテン=アメリカ、Bではインド、Cでは中央ユーラシアが題材とされており、世界史ならではのダイナミックな動きに関する内容

で、受験者の関心を引くものであった。全体的な難易度は標準である。

問1 質問としては標準的な問いであるが、古代アメリカ文明の文化名やその地域など、正確に知っていることが求められている。

問2 イベリア半島の歴史について、政治・文化両面からの質問である。どれも基礎的な事項と言えよう。

問3 15世紀以降のアフリカについて問うている。①③の波線部が世紀の部分になされており、また正文のアンゴラがポルトガルからの独立であることは、19世紀末のアフリカ分割をしっかり理解していなければならず、難問である。

問4 甲骨文字とインダス文字の写真を三つから選ぶ問題。基礎事項である。単に写真を使うのではなく、ア・イを文章表現にするなどの工夫が欲しい。

問5 インドにおける出来事を、古代から近世にいたる四つの文章から選ぶ問題。ゴール朝が何世紀にインドに侵入したか迷った受験者も多かろう。やや難問である。

問6 イギリスが植民地とした四つの地域の出来事から選ぶ問題。内容もリード文に密着し、正文も平易である。

問7 ヨーロッパの移動や移住について問うた問題でいずれも押さえておきたい事項である。

問8 遊牧世界と農耕世界のかかわりについて、中国や中央アジアの状況を述べたもの。時代の思い違いをなくして正確にとらえておく必要がある。標準的で良問である。

問9 地図を用いた問題で、セルジューク朝とその進出ルートを選ばせるものである。トルコ系、11世紀、ビザンツ帝国を圧迫、という語から、セルジューク朝は容易に判断できる。またそのルートもビザンツ帝国や十字軍の原因などを想起すると判断できよう。

4 試験問題の表現・形式

本年度も「世界諸地域の移民と交易による結び付き」、「文化の多様性」などリード文の中で高等学校学習指導要領で重視されている内容が反映されていた。設問形式では昨年度より誤った（関係のない）ものを選択する形式が増加したことに加え、複数事項の正誤を問う形式の問題数が増えた。特に後者は二つの事項の正確な知識が必要とされるため、四つの文から一つの正文又は誤文を選ぶ形式に比べ、正答率が下がることが予測される。また地図を利用した問題にも、簡素で明確な地図を示して背景となる事項に関する考察を求めるなど工夫が見られた。ただし、異なった問題で正文の内容が時代的、内容的に近接する出題があったことが残念であった。しかし全体的にはオーソドックスな形式で平易な内容を問う出題が多かった。

以下、試験問題の表現・形式について「世界史B」の教科書・学習内容等からの視点を含めながら大問ごとに検討を行い気付いた点をまとめた。なお大問の四つそれぞれに関する全体的な総括は前記3を参照されたい。

第1問 生業と労働の歴史

問8 ①③の両方の文で年代が問われているため、難しさを感じる。

問9 一部の教科書には使用されているものの、②の文中の付置という表現が高校生には難しいと感じる。

第2問 学校・教育の歴史

問1 二つの正解の用語の関連性がなく、一つの出題として、この組合せが適切であるか疑問を感じる。

問3 下線部は「12世紀ルネサンス」という歴史用語だが、設問は12世紀に起こった事柄を問う問題であるため、違和感を感じる。12世紀について問うならばリード文を変えた方がよかったのではないだろうか。

問7 問6と同じ出題形式の問題が続いたが、この形式の問題は内容がかなり平易なものでない限り正答率が上がらないと思われる。また第1問問9の労働組合法と教育法（初等教育法）という時代的近接事項の出題も少し疑問を感じる。

問9 ユーゴスラヴィアの地図上の位置と、それについての記述として正しいものを選ぶ組合せ問題。数年前から始まった形式であるが、地理的な知識を問う問題は今後も必要と思われる。設問文はもう少し簡略化した方が題意がくみ取りやすいのではないだろうか。

第3問 信仰や宗教の歴史

問2 世紀ごとに年代順に事項を並べ、受験者に歴史的な流れとともに周辺との結び付きの理解を求める、工夫を凝らした表現がなされている良問である。

問4 bの写真は不鮮明であるため気を付けてほしい。

問5 第1問問8と同様、二つの文に年代が含まれ、それがいずれも誤りの要因であるため、難しさを感じる。特にイスラーム世界や東南アジアの年代（世紀）を問うことに受験者は困難を感じるのではないか。

問6 第3問問1のラーと、この設問のオシリスがともに正文に出てくることは時代、分野、地域的に非常に近接した内容であるため考えてほしい。

第4問 人々の移動・移住の歴史

問3 本試験唯一の波線部（語句・事項）を問う形式の問題で①③の波線部がともに世紀の部分になされていることは一考してほしい。

問4 単に写真を使うのではなく、ア・イを文章表現にするなどの工夫が欲しい。また6択の設問としても物足りなさを感じる。

問7 「ロロの率いるノルマン人の一派」の子孫がイギリスにノルマン朝を建てたため、誤解される可能性がある。「ノルマン人の一派を率いたロロが」の方が誤解を招きにくい。

問9 単純な地図問題であるが、授業に密着した内容であり、様々な背景的知識を試験の中で思い出させることのできる良問である。

5 要 約（総括的な評価）

本年度の「世界史B」の設問は内容的には基本的事項を問う出題が多かった。地域的には西アジア・アフリカからの出題が増えた。また時代的には中世からの出題が多く、近代・現代からの出題は少なくなった。出題の大半は基礎的で高等学校学習指導要領の方針にも適合するものであった。

地域、時代とも幅広く出題しようという意図は十分に感じられる。しかし、教科書全体の記載のバランスを考えてみても西欧・北米の近代史が本試験ではもう少し多く扱われてもよいのではないかと考える。また二つの別の設問の正解の事項が、非常に近接した内容となってしまったケースが複数存在していたことは、この試験の結果が受験者に与える影響を考えれば一考の余地があるよう

に感じられる。さらに一部の問題で、教科書において、あまり頻繁に扱われていない内容が盛り込まれていた。誤文の一部とは言え、使用教科書によって受験者に不公平感を持たせることは避けるべきではないだろうか。作問側には様々な制約があることは理解できるが、出題範囲のバランスや題材のレベルの一定化に一層の配慮をお願いしたい。

おそらくセンター試験の問題は日本で最も注目を集める試験問題であり、その内容・方向性・レベルが高等学校の授業に与える影響は極めて大きい。その点で、今回の出題も、地理的概念、日本を含めた同時代史、接触と交流の影響など高等学校学習指導要領で重視されている内容を踏まえたものであり、特に本年度の本試験は高等学校の授業に反映できる内容が多かった。その上で世界史が地理歴史教科の中で唯一の必修科目である意義を考えれば、センター試験の出題に際しても、受験者のみならず履修者の興味・関心が喚起されるように配慮していただくとともに、他の科目との問題の難易度においても常に気を配っていただけると幸いである。